

おわりに

「いい川」と「いい川づくり」の重複化

日本の川は、都市河川や田園河川はもちろん山地河川ですら、ほとんどが何百年、何十年、人と自然が織りなし育んできた「作品」である。ときに氾濫しても土地の風土に溶け込み、知恵と汗のたまもの名作が多い（多かった）。その名作の刻み込まれた心象風景を人々は「〇〇川の原風景」と呼ぶ。野生美の川もあれば、雅の川もある。墨絵のようにシンプルで奥深い作品もあれば、水彩画、油絵のように作品もある。それぞれ土地の香りが漂い味わいがある。とりあえずは、名作が「いい川」と言うことになる。

ただ川には、絵画や彫刻のような永遠の完成品というものがない。未完の作品というわけではないが、洪水や社会経済の変化にともなって、「河川管理」を必要とする特殊な作品である。そこに「つくる」行為が生まれる。「つくる」には、必ず前と後、それをつなぐプロセスがある。

ところで、このワークショップも回を重ねるごとに、「あいまいな日本」を象徴するかのごとく、「いい川」と「いい川づくり」の境があいまいになりつつある。私だけでなく実行委員の大方の印象のようでもある。どういうことなのか、少し考えてみたい。

根本は、近年まで「川づくり＝河川改修工事」の工事主義時代が長く続いたことに大きな問題がある。川づくりの主体は事業者の河川管理者（土木技術者）であり、そこでは治水安全度の向上と効率性、経済性の追求が「いい川づくり」であった。工事主義は河川の原風景と環境を破壊し、何代にもわたって培われてきた人と川との関係を一瞬に奪い、市民感覚の「いい川」とのかい離を生み出した。河川改修工事にすべての原因があったと言わないが、大きな要因になってきたことは否めないであろう。そしてそのかい離が、時には対立構造をつくってきたこと（いまもあるが）は周知の通りである。

流れを大まかに整理すれば、その反省からまずは、改修工事に賛成・反対を含め「親水」や「〇〇川らしさ」をキーワードとした環境対策が模索されるようになる。「らしさ」では河相論や景観論が大きな役割を果たした。80年代の半ば頃から急速に、デザインはともあれ実際に親水や景観に配慮した河川環境整備事業が増えていく。それまでの河川改修が画一化、標準化志向であったとすれば大きな方向転換である。

次いで、エコロジー思想やまちづくり意識の高揚もあり、「ほんものの川づくりとは何か」という問いかけが本格的に始まる。

こういった流れを後押ししたのは、反対型、提案型、活性化型、調査研究型など様々な市民運動や市民活動の興隆であり、それに触発された市民の川を見るまなざしの変化である。また市民活動者や研究者が、「ほんものの川づくり」に欠かせない生態、景観、歴史、文化、まちづくり、参加等々、河川管理者にとって専門外の領域の知識や情報を蓄積してきたことも見逃せない。

いつの間にか気が付けば、いい川をつくらうとすれば、河川管理者と市民団体さらには研究者が協働し、治水機能のみならず自然的歴史的文化的環境を含め包括的なアプローチが必要とされる構図が生まれたといってもよいであろう。と同時に、「いい川づくり」の方法において、工事だけでなく、市民主体の行動も大きな選択肢の一つであることが浮かび上がってきた。総合コーディネーターの延藤教授が、これからの「まちづくり」は「まち育て」といわれているが、その文脈は「川づくり」にも当てはまる。

実際、現存あるいは潜在的な宝物を発見し、育み、育てる、そういった川づくり事例も全国に広がりつつある。川育てタイプの川づくりは、「いい川」と「いい川づくり」かなりの部分で重なる。ワークショップにおいてもこのタイプの発表事例が年々増えつつある。こういった流れが、「いい川」と「いい川づくり」のあいまいさに表れたのではないかと考えている。いい方向で、混乱ではないであろう。

なおいずれにせよ、これまでは「いい川」や「いい川づくり」の事業者ないし生活者からの応募がほとんどであった。今回は、北海道の川の時刻表のように、旅する人の視点からの提案が新しく生まれた。例えいい川であっても日常に埋没していると、ことにその川で市民団体が活動していないときには、意外とその宝物が見過ごされていることがある。そういった川の発見もこのワークショップの課題の一つであろう。

「川の日」ワークショップ実行委員長
森 清和（全国水環境交流会代表幹事）